

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K01	氏名	内田 稔
研究主題 —副主題—	日本の学校教育改革の文脈におけるグローバル・コンピテンスの概念に関する考察		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	宮崎 猛
所属校	世田谷区立塚戸小学校	校長	永山 満義

キーワード： グローバル・コンピテンス 国際理解教育 グローバル教育

### 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

PISA 調査 2018 より、新たな評価指標としてグローバル・コンピテンス(Global Competence) が導入される。日本においても全ての学校教育現場でその育成が求められるようになると考えられる。

既にユネスコスクールを中心とする ESD をはじめ、国際理解教育、グローバル教育といった、それに類する多様な実践が一部の学校では行われてきている。しかし、提唱する理念や育成すべき資質・能力についての定義は、互いに近接してきているとはいえ、いまだ一致しておらず、教員の混乱、普及の阻害要因になっているとの指摘もある。

さらに、現在進められている学習指導要領の改訂では、新しい学力観が示されている。今後、広く日本の学校教育現場で、その育成を図るためには、より日本の文脈や学校における実践に引き寄せた形で、概念を整理する必要があるだろう。

本研究の主たる目的は、国外、国内におけるグローバル・コンピテンスあるいは、それに類する資質・能力に関する代表的な概念および定義について比較・考察を行うことで、今後、我が国においてグローバル・コンピテンスの概念化を図る際に、有益な示唆となり得る諸要素を析出することにある。

### 2 研究の内容・研究の方法

本研究では、関連する文献上のテキストに示された諸概念および定義に対して比較・考察を加え、分析を行うことで有益な知見を導き出すという、質的な研究方法を用いた。

具体的には、まず、国外、国内におけるグローバル・コンピテンス、またはそれに類似する資質・能力の定義・概念を複数取り上げ、それらを文部科学省が提唱する資質・能力の三つの柱に沿って分類・整理した。

次に、国外における定義・概念について比較・考察を行い、共通点とそれぞれの特徴を指摘した。

さらに、国内における諸定義・概念間においても同様に比較・考察を行い、やはり共通点とそれぞれの特徴を明らかにした。

最後に、それらの結果をもとに国外、国内双方の共通点および特徴について比較・考察を加えることで、示唆的な要素を析出した。

### 3 研究の結果

ここでは、国外における代表的な定義・概念として、OECD の提唱するものと米国 CCSSO & Asia Society によるものを、また国内における代表的な定義・概念として、国際理解教育、グローバル教育、ESD がそれぞれ提唱するものを取り上げた。

それらを文部科学省が新しい教育課程において、全ての教科等の目標や内容を再整理するための観点として位置付ける、資質・能力の三つの柱に沿って整理・分類したものが次の表 1 である。(1 観点のみ例示)

表 1. 観点「学びに向かう力・人間性等」に基づく分類・整理

資質・能力の三つの柱		OECD	CCSSO & Asia Society	国際理解教育	グローバル教育	ESD
学びに向かう力・人間性等	どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか	共感	状況、出来事、問題、現象の改善について考えるための個人的、協働的な機会を見つけたり、つくりたりする。(4-1)	人間としての尊厳	自己理解・自己認識	リーダーシップの向上
		柔軟さ	ローカル、リージョナル、あるいはグローバルの改善に貢献するために、創造的かつ倫理的な方法で個人的、協働的に行動し、その影響を評価する。(4-2)	寛容・共感	異文化や多様性の尊重・寛容	人間の尊重
		異文化の人々への開かれた心	ローカル、リージョナル、あるいはグローバルな改善を提唱し、貢献するための自分たちの能力について熟考する。(4-4)	参加・協力	地球市民としての自覚と責任、行動への意欲	多様性の尊重
		文化的他者への尊敬				非排他性
		地球意識的な責任感				機会均等
						環境の尊重

国外、国内における定義・概念の比較・考察の結果をまとめたものが次の表 2、3 である。

表2 国外における定義・概念の比較・考察の結果

観点	共通点	OECDの特徴	CCSSO & Asia Societyの特徴
知識 (何を理解しているか)	・地球的課題を対象とする。また、事実認識にとどまらず、事象の意味や影響、関連などについての理解を含む。 ・多文化共生における自他の見方・考え方とその影響の自覚を重視する。 ・社会的多様性を幅広い文脈でとらえる。(年代、家族、格差等) ※但し、OECDは、他の観点を含めると、この点について一貫性を欠く。	・全ての個人を複数の文化的集合体に参加し、ユニークな文化的位置を占める存在として認識する。	・対象とする課題についてローカル・リジョナル・グローバルの3つのレベルを包含させている。 ・課題に関する「意義の説明」を求める。 → いずれも、自分とのつながりが重要視されていると考えられ、「改善への自律的行動」との関連が想起される。
技能 (何ができるか)	・コミュニケーション能力	・コミュニケーションの対象は、異文化、外国から来た人々を想定。方法は、認知・心理的。	・コミュニケーションの対象は、多様な人々。方法は、具体的・方略的。 ・問題発見・解決・質問づくり → 「改善への自律的行動」との関連が想起される。
思考・判断・表現力等 (理解していること・できることをどう使うか)	・分析的(論理的)・批判的思考力		・メタ認知
学びに向かう力・人間性等 (どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)	・なし ※どちらも前提として、状況に対する責任感を伴う、と言うことは可能。	・態度(内的・精神的側面)の強調。 ・核としての「価値」(人間の尊厳の尊重、文化的多様性の尊重)を提唱。	・行動レベルでの提示。 ・「改善への自律的行動」ともいえる軸で首尾一貫。

表3 国内における定義・概念の比較・考察の結果

観点	共通点	国際理解教育の特徴	グローバル教育の特徴	ESDの特徴
知識 (何を理解しているか)	・地球的課題 ・多様性 ・相互依存性	・未来への選択	・グローバル社会の功罪 ・世界の問題を身近な事柄と結びつける	・持続可能な社会に備わる特徴(要素)
技能 (何ができるか)	・コミュニケーション ・情報収集・活用		・協働 ・探求テーマとプロジェクト	
思考力・判断力・表現力等 (理解していること・できることをどう使うか)	(批判的思考) (問題解決) ※内契・相連		・問題解決に至るプロセスとしての批判的思考 ・バイアス・ステレオタイプの自覚	・システム思考 ・未来像(ビジョン)の構想・共有・計画
学びに向かう力・人間性等 (どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)	・寛容 ・多様性の尊重 ・主体的参加・行動	・グローバル・ローカルな市民意識 ・人間の尊厳	・グローバル・ローカルな市民意識 ・自己理解・自己認識 ・自分のライフスタイルの見直し ・未来	・人間の尊厳 ・機会均等 ・環境の尊重

比較・考察を通して析出された示唆的な要素として次の六点が挙げられる。①多様性や文化の差異を個人レベルで捉えること(国家や集団の文化などに限定しない)、②自他の物事の見方・考え方とその影響を自覚すること、③システム思考を指標にいかに取り入れるか、④分析的・論理的思考力、⑤質問づくり、⑥改善への自律的行動(自分を成長させ、状況を改善するための省察、アセスメント、コミュニティづくり、対話、実行などを含む)、である。

中でも、国家や文化集団といった枠に限定せず幅広い文脈から社会的包摂を捉えること、事象の全体性・複雑性・相互連関性を把握するシステム思考を具体的指標に落とし込むこと、他者や環境との相互依存関係

の中で自律性を保ちながら、それらに働き掛けることで自他の成長、状況の改善を図るという、いわゆる相互親和的(convivial)な市民像などは、今後、我が国におけるグローバル・コンピテンスの概念化を進める際に重要な要素となるのではない。

#### 4 研究の考察

本研究には、次の二点において限界及び課題がある。

第一に、グローバル・コンピテンス、あるいはそれに類する資質・能力の定義・概念については、本研究で取り上げたもの以外にも数多く存在し、それら全てを比較・考察の対象とすることはできない、という点にある。

第二に、各定義・概念の中には、本来異なる観点によって資質・能力を分類しているものが含まれているため、文部科学省が示す資質・能力の三つの柱に沿って再分類・整理する際に、もともとの文脈や意図から離れたものになってしまう可能性は否定できない、という点である。

それらの限界や課題はあるものの、今後我が国においてグローバル・コンピテンスを概念化する際の方法や視点に関して議論を積み上げるための一つの批判材料を提示できたことは、本研究の成果であると考えている。

#### 5 今後の展望

グローバル・コンピテンスの育成を全ての学校教育現場で行うためには、概念を整理し、具体的な指標を明示した上で、教育カリキュラム全体に位置付ける必要がある。

その際、グローバル・コンピテンスを育成する教育と一般的な教育との関係がどのようなものであるかを吟味しなければならないだろう。一般的な教育という全体があり、その中の一部分としてグローバル・コンピテンスの育成というものが特別な領域として位置付けられるのだろうか。本研究の成果から考えても、このことには強い違和感を覚える。なぜなら、社会的包摂、批判的思考、改善に向けた自律的行動といった、グローバル・コンピテンスとして示された資質・能力の大部分が、教科・領域に限定されない汎用的なものであるといえるからだ。知識に関するものも、CCSSO & Asia Societyが示すように「世界を調査する」という視点からみるならば、本来その獲得こそが各教科・領域の役割であり、それらの学習内容に当然組み込まれるべきものとも考えることもできるだろう。

今後は、グローバル・コンピテンスの概念化とともに、カリキュラムへの位置付けに関しても考究を進めていきたい。

